



鳥居集
全

特別
~5
6067



八五
6067



洛東芭蕉菴再興記

四明山下乃西菴一乘寺村に禪房あり
金福寺といふ土人俗称して芭蕉菴と
呼階あり翠微に入ると二十歩
一塊乃丘ありさきよりそを以て
遺蹟しとすとも久し閑寂なる
にして緑苔や、百年の人迹を
とくとも出管なきと一が
茶煙を



57-2498

かきつちとし水切やとくすう樹老
多睡してまきうに懐古の情はたけ
ゆるやく長安名利の境を歌とて
ともじつた俗をきとてよじとありす
難大のたに難をたてて樵牧乃路門を
先くわう豆腐賣る小ぢもちうく酒飲
活ふ肆も遠きたあすれと詠入吹雪乃
相従ましく半日乃困をも貪るまじうも
よく飢をさきくもぢも自在なをなし

4
世にありし老老乃そのみちもらう
ものうりたうしれと活きたのさくやく
墨の色をたたく年月流去水くまのた
あつらふらふはたさるると無功徳乃
宗凡のう猛く不立字乃見解マヤヤ
まらめら佛経聖典のすくは長物とふ
いとささるりのものたらく花むるまんと
ゆるゆるしき経漢のよめいたはるに臺臺
乃座よさら寺術は紙魚乃やうとからひに

も舞ひ入るるにふくむとぬくみす也
下やうの追ひ居くもあつたうる勝地に
うぬたもくぬるのううたるをこほひぬく
うらむてとらんこと罪人むらさき侍れそ
やそ回き入るるをささひうあふとくろ
一州屋を再興してりとも守りゆ月れ
るうめとる歸せ月のまをささひ守りすに
會して翁入る鳥爪をゆくううハあめ再興
突起る野首ハ自在菴道立子あり

3
麻のたもとに暁天乃霞をとさるひ白河乃
山越して湖水一望入るらに杜甫皆を
決^{サキ}たのれ辛崎る松の朧たはに一世の
あ境を扱めぬひらんされと都徑細の
たようよけれをとしてたうくは岩阿に懸い
ぬひけたやうぬを枯ゆま入あとなく
たうきもひしうらうの大徳めくがけまを
ささるら草堂を芭蕉なると号けまを
翁の風韻をとさるひ遠志はるかくたよひ

しよまはたしあやうらふひさる真守に
名しあやう異くもよはたやハ多々依
とそきいあんとけとらにて甚弱入
口跡く世にまらゆもあつすすてふ
更るもの華入るみになんをどう引く
あまひを所るも是く祢住侶松宗師の曰
さうやう我をさひいらせよとびあれ
たふんととらなむたをきうハけ山寺に
入れりて入まらみよとよしけこうす

2
押したの比ちりさりとけく来りらにや
尊うらま里麦くは女も芭蕉庵を問ハ
うがらひしとを扱ひた古く名くしし
さるも入其少とをさくは寝た少ハ一歩
鉄舟といへる大徳の寺に住するひらる
別に一室を此とらに構へ手自雪炊乃
を負きたのみ客を耐してかうまことり
たりのも蕉翁入り白とすてハ個うちあし
内いあまたとと安機逃禪入郷をるら

とまはひたはすともみぬはるる其比や
蕉翁山城の東面に吟りしく清瀧の
浪に眼裏の臺を洗ひ岩山のやを
代謝の時を感し或は丈山も夏衣に
薰風の里を収哉と賦し長嘯の古墳
にさび独りの神をまを神にあら
薦を著てたれ人いふやとらるめれし
よりまのふや雀をよめまはれしと孤山の
風流を雀集の大日持る林蔭に杖をたて

通玄子乃大祖父坦菴先生と蕉翁乃
わろくしのをを学いたまはる師にて
わろくあはとらるる通玄子の今げ奉に
あはるるまもたるるものくはとらるる
なり

安永丙申五月中前二日
平安夜半真蕪村情記

山より降りて海を渡る
あすの酒を飲むは社
中へ行くは下りて蕉翁乃
伊波を渡るは法を
志は国をわたりて
あつては社を
結東て空を色令福を乃
強照を乃て居るは
ありぬ

徳らるるよあつて田を
通立

友もわくあつて松宗
茶乃あつて村
車乃あつて田福
中河のわくあつて
乃あつて歌子
あつて美角
あつて定雅

かたさうの雪ふかつる草の庭 春載
あまのこころもはくさく梅 春面
あまのこころもはくさく方罫
うきうきに重き刀さき 秋
窮も啼 待も笑へ 存ら 西大魯
今や 解散のついで 秋 眉山
文正の意はく 病のちうめく 存漢
わうら 存くはく 存はく 存人 自笑

出

物りくはく花はく 存くはく 存白
あまの餅を あつたの雲 存白
老れぬのなを 存くはく 存白
くくく 刻む 存くはく 存白
あまの餅を あつたの雲 存白
横を 存くはく 存白
志のあまのこころ 存くはく 存白
静く あつたの雲 存白

おや雲の宿らふむをよか也 無友
奈久くもる里乃神業 石友
今すこし幸き酒とら松とけ 東尾
西も水の塔我もまこくす 瑞色
おほくは是も忘れり 維弱
其も自しゆれもく 徳のき雲史
おほくも乃多き拙さ 拙学

出

